

授業改善に立ち向かう ―どのような方法で実行していますか― 一徹国語人

学習の進め方・授業づくりは、これからどんどん難しくなっていくと考えられる。

それは、児童に身につけさせたい能力が今まで以上に多角的になっていくこと、学習手である児童の家族生活が少人数となり多様な体験をもちにくい日常生活になつてきていること、学校や家庭での学習方法がかなりのスピードで変化してきていることなどに関係している。

これからの授業改善は教師個々の研究工夫だけでなく、共同研究を積極的に取り入れていく必要があると考えられる。

あちこちの学校や研究会を訪ねて授業を参観させてもらうと、学習内容や方法を児童たちが話し合いで決め、グループ学習を軸に調査、話し合い、相互評価を含む発表をする、といった進め方をしているのによく出会う。

また、自分だけで学ぶ、友達と学ぶ、大人たちから学ぶといった「学び相手」の広がりや、教材そのものの分析、教材以外との

比較、教材を離れた資料中心のテーマ学習など、学習対象物の広がりも見逃せない。

グループ構成においても、生活班グループを基本としながらも、発展して同一学習目的のグループ、役割分担グループ、興味・関心別グループなど、学習内容によって構成方法や人数を変化させる学習スタイルも出てきている。

こうした新しい学びの形式・方法をどのようにつくり出していったらよいのか、参考になりそうな例を紹介する。

■共同研究者を募集

横浜市立神奈川小学校では、授業改善をしようと考ええる教科・単元が決まると、他校の先生を含めて協力者を募り、共同で研究を進める。

教材分析法、学習展開法、評価法などについて、自校だけでなく参加した他校の先生方からも積極的に意見が出されるため、幅広いアイデアや批評を集めることが可能になる。

■研修会で全員が提案・批評

郡山市の夏の研修会では、65人の国語研究会員全員が学年分科会に分かれて、自分が実践した授業の内容と方法・成果をプリントにして報告、提案をする。提案単元は自由。工夫した内容と方法について話し合う。

日ごろ、授業を適当にやっていたり記録を正確に詳しくとれていないと実践をきちんと報告、提案することは難しい。65人全員がそれをできるということは、研究会全体の意識の高さがうかがえよう。

自分自身で研究し工夫することはもちろん不可欠だが、こういった例を見ていくと、周囲の人たちと協力して、お互いに切磋琢磨していくことの重要性を感じる。この点に関しては教師も児童も同じ、だれと学ぶか・どこで学ぶか・どのように学ぶかも大切であろう。